

2 中高連携英語力向上 第2年次の歩み

(1) 養老町立東部中学校における実践

< 授業実践 >

授業実践に向けての構え

- ・「単元で育てる」という構えで単元のねらいを明確にする。毎時間の始めの5分間に「帯活動」を設定し、生徒が単元終末までに目指す英語表現に習熟するよう、それらの表現を繰り返し指導する。
- ・生徒がコミュニケーションを図る活動に意欲をもって取り組むことができるよう、活動内容に英語でコミュニケーションをする必然性をもたせる。
- ・生徒一人一人が願う姿を実現し、できた喜びが実感できるよう、実態把握を基に、指導過程、学習形態を工夫し、指導の充実を図る。

第1回授業交流研究会

【期日】 平成18年6月29日(木)

【公開授業】

- ・単元名 New Crown English Series Book 1 Lesson 3 I Play Football
- ・授業学校・学年 東部中学校 1年
- ・主な提案内容

ねらい：相手の持ち物は何かを尋ねる活動を通して、What を用いた文で問答することができる。

課題：What を使って相手の持ち物を尋ねよう。

活動：一人一人の生徒が配布された異なる物の絵カードをポケットに入れ、その中身を相手に尋ねる。活動は目標と相手を変えて2回行う。

工夫点：「帯活動」を通して、自己紹介で使う表現を第1時から第5時に至るまでに一文ずつ加え、同じ表現を繰り返し使用することで、表現の定着を図った。

I am Lisa. I am from Australia.

I am Lisa. I am from Australia. I like dogs.

I am Lisa. I am from Australia. I like dogs. I play tennis.

I am Lisa. I am from Australia. I like dogs. I play tennis. I practice it every day.

I am Lisa. I am from Australia. I like dogs. I play tennis. I practice it every day. I don't have a new racket.

【授業研究会】

- ・一人一人の生徒が異なる物が描かれた絵カードをポケットに入れ、その中身を相手に尋ねるといった対話活動を設定したため、対話する必然性をもたせることができた。そのため、生徒の興味を喚起することができ、意欲的な姿がみられた。
- ・1回目はポケットの中身を数多く探すことを、2回目は相手となるべく長く会話を続けることを目標にして、活動を行った。このように、生徒の目標をステップ化し、活動を2回行ったことがねらいの実現につながった。
- ・「単元で育てる」という考えに立ち、単元における本時の位置付けを明確にしている。また、「帯活動」の成果が、本時の活動にも生かされていた。
- ・「話すこと」と「書くこと」との関連を図った指導が大切である。1年生のこの時期は、話したことを正しいスペル、基本的な符号を意識して書くことも大切である。

第2回授業交流研究会

【期日】 平成18年10月17日(火)

【公開授業】

・単元名 New Crown English Series Book 2 Lesson 5 Speech - 'My Dream'

・授業学校・学年 東部中学校 2年

・主な提案内容

ねらい：聞き手を意識して、内容を確認する問いかけを入れながら将来の夢についてスピーチをすることができる。

課題：聞き手を意識して、Do you know(like)~?などの問いかけを入れながらスピーチしよう。

活動：スピーチ原稿をもとにスピーチを行うとき、聞き手の理解を確かめる問いかけを適切な場所に入れながら行う。個人練習をした後、前半、後半でペアを変えて行う。

工夫点：生徒が課題を主体的に生み出すために、教師がスピーチの演示を2種類行う。一つ目は、問いかけのないスピーチ、二つ目は問いかけのあるスピーチである。生徒は2つを比べて、聞き手を意識したスピーチの仕方に気付き、課題をもつことができると考えた。

問いかけ Hello, everyone. I'll tell you about my dream.

の例 I want to be a soccer player.

(下線部) First, I like soccer very much. Do you like soccer? When I was 7years old, I started soccer. ...

【授業研究会】

- ・一人一人の学習状況を見取り、適切な指導・評価をしている。活動を前半、後半に分け、中間に教師が目指す姿を明確にした評価を行ったことにより、活動後半での生徒の練習に向かう姿がとてもし欲的になった。その結果、学級全体の前で聞き手に問いかける英文を入れながらスピーチする生徒の姿が生まれた。
- ・単元終末に My Dream のスピーチを行うため、「帯活動」として、「職業当てクイズ」を位置付けた。このことにより、3つの効果があった。生徒の職業にかかわる語彙が増えた。スピーチ内容としての仕事に対する興味・関心を喚起することができた。本単元で大切にしたい文法事項である不定詞の用法を定着することができた。
- ・教科書題材を十分に生かそうとしている。生徒は教科書のスピーチ文から文章構成(Topic, Body, Conclusion)(First, Second, Third)や、不定詞を利用した表現を学び取り、それらを活用してスピーチ原稿を書くことができていた。
- ・スピーチの指導にかかわる年間、及び3年間の見通しをもって、計画的、段階的に指導したい。「1年生では、2年生では、3年生では」のように具体的にイメージをもつことが大切である。
- ・「帯活動」や教師のスピーチを聞き取る場面で、その活動を行う目的を生徒に理解させることが不十分であったり、活動後の教師の指示が曖昧な点がある。生徒の意識に立って、聞き取る視点を前もって示したり、活動のゴールを示し、次に何をするとよいのかなど、学び方の指導を充実するとよい。

<グローバル・スタンダードによる英語力分析調査>

【期日】 平成18年8月23日(水)

【受験者】 スターターズ...17名 ムーバーズ...40名 フライヤーズ...6名

【結果分析】

昨年度と比較すると、スピーキングとリスニングにおいて今年度の方が高いポイントを得た。これは年間を通して「聞くこと」「話すこと」の言語活動を重点的に指導をしてきた成果と思われる。リーディングとライティングにおいては、スターターズでは高いポイントを得られたものの、ムーバーズ、フライヤーズと級が上がるごとにポイントが低くなっている。これは、ある程度まとまった英文を読み取ったり、書きまとめたりする力が十分身に付いていないためであると考えられる。今後は、この結果を踏まえ、「聞くこと」「話すこと」の活動後に「書くこと」の活動を位置付け、「書くこと」の指導事項の定着を図りたい。

<学習環境の充実>

外国人講師との国際交流

養老町国際交流協会を通じて、ヨーロッパから短期ホームステイで来日された方を講師として招き、日本の文化との違いなどについて交流を深める場を設けた。この交流は、生徒にとって、養老の自然豊かな町並みや歴史などについて様々な国の方に紹介できるよい機会となった。また、校内見学を実施し、普段の日本の生徒の学校生活に触れていただくことができた。

辞書を活用した授業

英和・和英辞書を購入し、普段の授業に活用した。特に、スピーチの原稿作りや英作文の「書くこと」の言語活動において辞書を活用した。生徒は、自ら語彙を調べ、表現しようとする姿が多く見られた。一方、未習語や難解な表現を多用した場合に、書いた作文の内容が他の生徒に伝わりにくい状況が見られた。そこで、読み手を意識し、未習語を平易な表現で言い換えるよう指導した。その結果、既習語やより平易な表現を辞書から見つけ出そうとする姿が見られた。今後も、辞書を活用して主体的に表現しようとする生徒を育てていきたい。

<成果と課題>

「単元で育てる」ことを意識し、単元の終末までに単元で付けたい力を生徒が十分身に付けることができるよう「帯活動」を継続したことは効果的であった。同じ内容の表現を繰り返し使用し、話す内容が段階的に増えるように設定したことにより、生徒が使う表現内容を広げることができた。

コミュニケーションの目的が明確である活動を設定することにより、生徒は積極的に活動に取り組むことができた。また、本時に身に付けたい表現を使わなければ活動が成立しないように条件を設定することにより、生徒はその表現に習熟し、満足感をもつことができた。

一つ一つの活動のねらいを実現するために、生徒に具体的な目標を提示した。中間評価をする際、ねらいの実現状況について教師が具体的に評価をしたことにより、生徒が目指す姿がより明確になり、その後の活動に意欲的に取り組めるようになることがわかった。

中学校では、「話すこと」「聞くこと」の言語活動を中心として授業を仕組むことが多いが、中高の連携を考えた時、「読むこと」「書くこと」の指導事項も大切にすることが必要である。今後は、中心となる言語活動として、話したことを授業の終末に書きまとめる活動を設定することにより、「書くこと」の指導事項の定着を図っていきたい。

学習内容や言語活動とテストとの関連について、高校側から指摘を受けた。今後は、授業で行った言語活動とテストとの整合性を意識していきたい。